関東の地方都市の空襲体験談に基づくレジリエンス要因に関する基礎的分析

Resilience Factors Based on Victim's Narratives of Air Raid on Local Cities in the Kanto Region of Japan

○藤本 一雄[1]
Kazuo FUJIMOTO[1]

[1] 千葉科学大学 危機管理システム学科
Department of Risk and Crisis Management System, Chiba Institute of Science

In order to gain the lessons learned from individual recovery from sudden loss of life or property due to a disaster, resilience factor which is the ability to bounce back from adversity was examined based on the victim's narratives of air raid on 9 local cities (Chiba, Utsunomiya, Maebashi, Hitachi, Mito, Hachioji, Choshi, Kumagaya, and Hiratsuka) in the Kanto region of Japan during World War II. The main results from the analysis on the narratives of 1,117 people indicates that the reasons to bounce back from the adversity (sudden loss of life and/or property) are classified into five categories, "sense of purpose", "empathy", "inheritance of will", "sense of well-being and security", and "self-efficacy".

Keywords *: resilience factor, air raid experience, narratives, adversity*

１．はじめに

将来発生が懸念される大規模自然災害に対して，国民一人ひとりが事前の防災対策に取り組んでおくことが必要である一方で，万一自然災害によって逆境に直面したときにいかに立ち直る(回復する，復興する)のかを考えておくことも必要である．逆境からの立ち直りは「レジリエンス」と呼ばれ，様々な分野での研究事例がある [1)]．しかし，そこで想定されている逆境は，ネガティブライフイベント(日常生活で直面するストレス・失敗など)が多く，自然災害がもたらす人命・家屋の喪失といった極めて過酷な逆境に対する妥当性は検証されていない [1)]．

また，より過酷な逆境を体験した者ほど，立ち直るには多くの年月を要することが予想される．例えば，1995 年の阪神・淡路大震災の調査事例では，「自分がもはや被災者ではない」とほとんどの被災者がそう思えるようになるには 10 年以上の年月が必要であったとの知見が得られている [2)]．ただし，この知見は，様々な被災程度の被災者を対象とした調査結果に基づくものであるため，被災者の中でも過酷な体験をした者ほど，立ち直るまでにさらに多くの時間がかかる可能性も指摘されている [3)]．

わが国において，過去，多数の国民が人命・家屋を喪失するという過酷な逆境に直面したものの，その状況からすでに数十年以上が経過した出来事に太平洋戦争時の空襲(死者・行方不明者 30～50 万人)がある．空襲と自然災害とは，「外部からの突然の脅威によって，ある一定の地域において多数の住民が人命・財産等を喪失する出来事・状況」との点で類似している．また，「爆撃は非対人的な戦争行為であり，特定の個人の死を意図したものでないという意味で自然災害に近い」との指摘 [4)]も踏まえれば，空襲と自然災害とは共通する部分が多いと見なすこともできよう．

空襲からの復興(立ち直り)を国全体のレベルで見ると，朝鮮戦争による特需景気とその後の高度経済成長により成し遂げられたため

，「奇跡の復興」とも呼ばれている．その一方で，個人のレベルで見たとき，空襲によって人命・家屋を突然喪失するという過酷な逆境を体験した当時の人々が，戦後数十年の歳月をかけて，どのようにして立ち直ってきたのかについてはほとんど知られていない．そこで，空襲によって人命・家屋の喪失を体験した人々がその逆境からいかにして立ち直ってきたのかを明らかにすることは，将来の大規模自然災害(南海トラフ地震，首都直下地震など)による逆境からの立ち直り(レジリエンス)について考える上での貴重な資料になるものと考える．

以上を踏まえて，前報 [5)]では，空襲による逆境からの立ち直り(レジリエンス)に関する個人的要因を明らかにするために，千葉県銚子市の戦争・空襲の体験談を用いて，人命・家屋の喪失から立ち直ることができた理由について基礎的な検討を行った．しかしながら，得られた結果は，1 つの地方都市での体験談に基づくものであるため，信頼性が十分に確保されているとは言いがたかった．そこで，本報では，調査対象を空襲を受けた関東地方の都市にまで拡げて，同様の検討を行った結果について報告する．

２．関東地方の都市空襲について

空襲を受けた関東地方の都市は，表 1 に示す 12 都市である．なお，同表の「順位」は，アメリカ軍が空襲攻撃目標として全国 180 都市を人口に基づいて順位付けしたものである [6)]．東京(順位：1 位)は，1944 年 11 月以降，130 回の空襲を受け，特に 3 月 10 日の「東京大空襲」では 8 万人以上が死亡した [7)]．横浜(順位：5 位)では，1945 年 5 月 29 日の空襲により約 8 千から 1 万人の死者を生じた [7)]．川崎(順位：9 位)では，1945 年 4 月 15 日の空襲による死者は 768 人～1,520 人と言われている．これらの主要都市では，1944 年の本土空襲を受けて，同年 8 月から学童疎

表 1　空襲を受けた関東地方の都市

順位	都 市	人的・物的被害
1	東京	1944年11月以降，130回の空襲を受けた（3月10日の空襲では8万人以上が死亡）
5	横浜	5月29日の空襲により約8千から1万人が死亡
9	川崎	4月15日の空襲による死者768人～1,520人
51	千葉	7月7日の空襲により，死者は約1000余名
55	宇都宮	7月12日の空襲により、市街地の約65%が被災，600余名が死亡
57	前橋	8月5日の空襲により，被災面積は全市の22%，死者は535人
61	日立	6月10日の空襲で死者1275人．7月19日の空襲で死者143人
75	水戸	8月2日の空襲により，市街地の約八割が焼失し242人が死亡
79	八王子	8月2日の空襲により，死者445人，焼失家屋14,000戸
81	銚子	3月10日・7月19日・8月1日の空襲により，死者380人
105	熊谷	8月15日の空襲により，死者266人，焼失家屋3,630戸
120	平塚	7月16・17日の空襲により，死者330人以上，罹災戸数7,678戸

表 2　空襲に対する危機感に関する証言の例

都市	体験談
千葉	「だから，千葉の人達は，まだ東京のほうが一部やられていないで残ってるしね，千葉まではまだ番が回って来ないってな気持でおったんですよ．」
前橋	「殆どの人が前橋がやられるとは実感していないようだった．」
日立	「『警戒警報発令』『空襲警報発令』も日常化してくると，なれっこになり，さして緊迫感もないこのごろであった．」
八王子	「誰も空襲があるなどとは信用せず，近所の人々にそのような話をしても，『まさかね』と言う程度であった．」
銚子	「たびたび空襲警報が発令されたが，敵機は上空高く飛びすぎるだけであったので，何の軍備もない小都市である銚子へは，まさか空襲をしかけもしまいと，一縷の望みをつないだりもしていた．」
熊谷	「戦乱中といえ，まさか熊谷が空襲にやられるとは，全く夢にも思って居りませんでしたね．」

開が始まっていた．このことから，関東地方の中でも，主要都市では空襲に対する危機感を抱いている一方で，その他の地方都市では，危機感が相対的に低かったことが予想される．地方都市での空襲に対する危機感が低かった可能性を示唆する事実は，各都市の空襲体験談（後述）においても確認することができる（表 2）．

将来の自然災害に対する国民の危機感は概して低いと考えられる．そこで，自然災害に対する危機感との類似性を確保するために，本研究では，表 1 の 12 都市のうち，空襲に対する危機感が低かったと推察される地方都市 9 都市（千葉，宇都宮，前橋，日立，水戸，八王子，銚子，熊谷，平塚）を対象とすることとした．表 1 の地方都市の空襲被害を見ると，主要都市の被害に比べると小さいものの，各都市において，数百人から千人以上の犠牲者を生じ，数千戸から一万戸以上の焼失家屋を生じていることがわかる．

3．空襲体験記の収集

終戦から 20 年以上が経過した昭和 46・47 年頃，戦後 30 年（昭和 50 年）を目指して，日本各地で空襲戦災を記録する運動が活発化し，「○○市の空襲を記録する会」などが設立され，各都市で空襲体験記が刊行されている．そこで，各都市の空襲体験記を探す際，公立図書館 HP において「○○（市）　空襲」で検索した．その検索結果のうち，書誌情報から，多数の個人の体験談が収録されていると

表 3　収集した関東地方の空襲体験記と体験談数

都市	資料（空襲体験記）	発行年	体験談
千葉	『千葉市空襲の記録』	1980	140
宇都宮	『宇都宮空襲・戦災誌』	1975	96
前橋	『街角の証言－市民が語る前橋空襲』	1988	29
	『街角の証言－市民が語る前橋空襲（第2集）』	1994	45
日立	『戦災と生活　日立市民の記録』	1979	83
	『日立の空襲―語りつぐ戦災体験』	2003	21
水戸	『水戸空襲戦災誌』	1981	190
八王子	『八王子の空襲と戦災の記録　市民の記録編』	1985	131
銚子	『市民の記録 銚子空襲』	1974	77
熊谷	『市民のつづる熊谷戦災の記録』	1975	171
平塚	『市民が探る平塚空襲 証言編』	1998	134
		合計	1,117

予想される体験記を中心に，資料の購入・借用を行った．その結果，表 3 に示した全 9 都市の計 11 冊の体験記 [8)-18)] を収集することができた．

表 3 を見ると，これらの体験記は，戦後 30 年以上が経過してから発行されていることがわかる．これらの体験談の中には，人命・家屋を喪失するという逆境に直面したにも関わらず，数十年をかけて立ち直った人々の体験談も含まれている可能性がある．以下では，これらの体験記に収録されている計 1,117 名の体験談を分析の対象とする．なお，今回収集できた体験談数（1,117 名）は，前報 [5)] での体験談数（137 名）の約 8 倍である．

4．空襲体験談の分析

前報 [5)] を参考にして，1,117 名の体験談のうち，生命・身体・家屋の喪失といった「逆境」を体験した者の体験談のみを対象とする．これらの体験談を読むと，逆境に関する体験のみで，その逆境からの立ち直りの過程に関する体験が述べられていないものが多数あった．そこで，立ち直りの過程を含む体験談を用いて，逆境から立ち直ることができた理由についての分析を進めることとした．

まず，それぞれの体験談の中から，逆境からの立ち直りに関連する意志（「強く生きようと思った」「決意した」「覚悟した」など）や行動（「生きてきた」「働いた」など）を含む箇所に着目して，その前後の文脈から立ち直ることができた理由を抜き出した．その際，1 人の体験談の中に複数の理由が含まれている場合，それぞれを 1 つの理由として抜き出した．また，社会的要因に関する理由は除外し，個人的要因に関する理由だけを抜き出した．その結果，立ち直ることができた理由は，1,117 名のうち 29 名の体験談において確認することができた．表 4 に，体験者の属性（都市，性別，当時の年齢），逆境の状況（具体的な人命・身体・生命の喪失の状況），体験談（立ち直ることができた理由を含む）の一部を示す．

つぎに，立ち直ることができた理由をカードに書き出し，類似する内容ごとにグループ化し，各グループにタイトルをつけた．その結果，立ち直ることができた理由（レジリエンス要因）は，「目的意識」「共感」「意志継承」「幸福感・安心感」「自己効力感」の大きく 5 つに分類することができた（表 4 の「理由カテゴリー」欄）．この結果は，前報 [5)] での結果とほぼ同じである．以下では，それぞれの要因について詳しく述べる．

(1) 目的意識

「目的意識」は，一般的には「行動の目的に対する明確な自覚」と定義されるものである．その理由を見ると，「ど

表 4　空襲による逆境から立ち直ることができた理由

体験者	逆境（人命・身体・家屋の喪失）	体験談（太字：立ち直ることができた理由）	理由ｶﾃｺﾞﾘｰ（ﾚｼﾞﾘｴﾝｽ要因）
銚子 女性 30歳	「わが家も，わずか十年足らずの歳月でついに灰燼と化してしまったのだ．」→ **家屋の喪失**	「離れて暮らしていたふたりの子が，『母ちゃん，母ちゃん』と，両方から走り寄って来たのを，しっかりと両腕に抱きかかえて，しみじみと生きていた喜びをかみしめた．それと同時に，**どんな事があってもこの子らのために強くがんばらなければ**，と決意を堅くした．」	**目的意識** （10名）
日立 女性 16歳	6月10日のB29爆撃により父が死亡．7月17日の艦砲射撃により母・兄・妹が死亡、妹は8月24日に死亡．7月19日の空襲により自宅が全焼．→ **人命・家屋の喪失**	「運命とはいえ，あまりの変わり果てた姿に，あのとき母といっしょに死んでしまえばよかったと，苦しさとさびしさのあまり，両親の墓の前で泣いたこともいくたびか，だが**ふたりの弟をみては，私がしっかりしなければ**と自分で自分をはげましました．」	
宇都宮 女性 27歳	夫：空襲により死亡，自宅：焼失 → **人命・家屋の喪失**	「しかし，いくら叫んでみてももう主人は帰ってこない．寄りすがる唯一の柱である主人を失ったのです．**この先，子供と二人で生きてゆかなければならない**ーこう思うと，何か悲しい気持ちも先立ちましたが，しかし，どこか心の中で“強い”何かが込み上げてもきました．」	
熊谷 男性 20歳	焼夷弾の破片により重傷を負い、数ヶ月の療養生活を送る．→ **身体の喪失**	「歴史に残る熊谷戦災に辛くも一命を落としそうになった私は，死んだ気になって，**市のため社会のために貢献すべく**，今懸命の努力を捧げたいと，誓いも新たにいたした次第である．」	
銚子 女性 ？歳	家族：夫、長男（16歳）．「私かた隣家一帯たちまち火の海となり，五十余棟が焼き払われてしまった．」→ **家屋の喪失**	「**戦死された御遺族のことを思えば，わが家の犠牲くらいで泣いてはなるまい**と，心をとりなおし，翌日から再興日本建設の全国民の声に和し，努力しようと決心をかため，今日にいたりました．」	**共感** （9名）
熊谷 女性 29歳	空襲により自宅：全焼　→ **家屋の喪失**	「でも**私一人では無い，熊谷の七割の人達が皆同じだ**．焼けないにしても無きずと言う事はあり得ない．こうしてはおれない，後の事を考えなければ，という力が湧いて来た．」	
千葉 女性 10歳	空襲により，左手：大火傷，自宅：全焼　→ **身体・家屋の喪失**	「家は焼け，何一つ残らないのに，全然悲しいという気が起こりませんでした．多分，おかあさん（自分）の心の中では，**自分だけじゃないんだ，みんなもそうなんだという気持があった**のではないかと思います．」	
千葉 女性 16歳	空襲により，千葉師範学校女子部の生徒8名，教職員2名が死亡． → **人命の喪失**	「**『友の死を無駄にしてはならない．』**今年も亦子供たちに語りながら，この思いを抱いて，教師としての道を歩き続けているのです．」	**意志継承** （6名）
日立 男性 41歳	B29爆撃により，防空壕が崩落し，会社の先輩・同僚ら23名が生き埋め・死亡．→ **人命の喪失**	「われわれの親しかった先輩や友人を多数，本当に残念であった．工場の形骸をながめながら，これからいかなる荊の道があろうとも，**犠牲になられたかたがたのためにも努力しなければならない**と肝に銘じたのであった．」	
水戸 男性 28歳	空襲により，顔・手に重度の火傷 → **身体の喪失**	「幸いロの中から内臓はやられず，目もまぶただけで眼球をやられませんでしたから，不自由はありません．ですからやはり**生きていてこうして生活できたことは幸いだった**とその後も私はずっとそう思っています．」	**幸福感・安心感** （5名）
銚子 女性 ？歳	「いっさいの道具と衣類を灰にして」→ **家屋の喪失**	「戦火に焼失したものは大きくとも，**肉親をだれも失っていない大きな安心感**に，これからが本当の戦なのだ，しっかりしなくてはと，そのころのせいいっぱいの想いでした．」	
銚子 女性 20歳	「焼けない人の家を見ると，うらやましい．家がない．親類・両親の兄弟も皆焼け出され，･･･」→ **家屋の喪失**	「戦争は終わっても，私の家の戦争はこれからだ，と自分で自分にむち打ちながら，早く家がほしいと思う．」「**よし，男がいなくとも，何年かかっても，いつかはできる**．私の気持ちは燃え上がった．」	**自己効力感** （3名）
銚子 男性 12歳	「みじめな気持で，燃え終わった家のあたりをうつろな気持ちで見回った．」→ **家屋の喪失**	「わたしおよび弟妹たちも，その間全部家庭をもち，精神的なしあわせの日を送っていますが，豊かな生活にはほど遠いのが現実の姿です．でも**わたしは自分に言い聞かせます**．『与えられた環境下で，可能な限り最善をつくせ』と．」	

んな事があっても，この子らのために強くがんばらなければ」「この先，子供と二人で生きてゆかなければならない」「我が娘のために生きなければならない」のように，「子どものために」が最も多かった．このことは，逆境からの再起を図る上で，「自分のために」と考えるだけでなく，「他者のために」と考えることが重要である可能性を示唆している．

(2) 共感

「共感」は，一般的には「他人の体験する感情や心的状態，あるいは主張を，自分が全く同じように感じたり理解したりすること」と定義されるものである．その理由の内容は，「私一人では無い，熊谷の七割の人達が皆同じだ」「自分だけじゃないんだ，みんなもそうなんだ」のように，自分だけが逆境に置かれているわけではないと考える者と，「自分以上の最大の不幸にあわれた家庭は多数あることを聞き，深く同情する」「戦死されたご遺族のことを思えば，我が家の犠牲くらいで泣いてはなるまい」「私の家ばかりが犠牲者ではない，もっと悲惨な家が沢山ある」のように，自分よりもさらに過酷な逆境に置かれている人がいると考える者の 2 種類の傾向が見られた．

(3) 意志継承

「意志継承」は，親族以外の人命を喪失した者に多く見られた理由である．例えば，「友の死を無駄にしてはならない」「犠牲になられたかたがたのためにも努力しなければならない」などである．この「意志継承」は，災害時の「生きる力」に関する探索的研究 [19]での「意志のバトン」に相当すると言える．その例として，本研究と同様に「妻の死を経験し，死に際まで人助けをしていた妻の意志を継

ごうと考えた」のように犠牲者の意志(遺志)を遺族が継承する事例がある一方で，「震災後，息子が家業(農家)を継ぐと言って，そのために仕事を再開する意欲が湧いてきた」との事例も見られた [19]．それゆえ，「意志継承」は，人命の喪失を体験した者だけに限定される理由ではない可能性が考えられる．

(4) 幸福感・安心感

「幸福感・安心感」は，人命を喪失した者には見られず，身体・家屋を喪失した者だけに見られた理由である．具体的には，「家は焼けても，家族 4 人，無事だった私たちは本当に幸せだった」「肉親の誰もが傷を負わず･･･不幸中の幸いであった」のように，空襲による不幸に見舞われたものの，自分だけでなく家族も生き残ったことに対して幸福感・安心感を感じていた．この幸福感・安心感は，1940 年ロンドン大空襲でのサバイバーの 1 人である若い女性(空襲によって家屋は壊れたものの，恋人とその両親は無事)の証言「多くの人が亡くなり負傷した夜に，不謹慎かもしれないけれど，わたしの一生であれほど純粋で一点の曇りもない幸せを感じたことはありません」[20]とも符合している．

その一方で，体験談の中には「焼けない人の家をみると，うらやましい」，「戦後の生活の折々に，家を失い焼け出された者の辛さを何度となく味わい」「村の大半は焼けなかったのです．その村にあって焼けだされた私たちは不幸でした」などのように，「幸福感」を感じることが困難な者もいた．

(5) 自己効力感

「自己効力感」は，一般的には「目標達成のために必要な行動を効果的に遂行できるという確信」と定義されるものであり，その先行要因として，「遂行行動の達成」「代理的体験」「言語的説得」「情動的喚起」が挙げられている [21]．今回収集できた体験談からは，言語的説得(「わたしは自分に言い聞かせます」など)が先行要因として確認することができた．

5. まとめ

太平洋戦争時の空襲による逆境(人命・身体・家屋の喪失)を体験した個人がどのようにして立ち直ったのかを知るために，関東の地方都市 9 都市(千葉，宇都宮，前橋，日立，水戸，八王子，銚子，熊谷，平塚)の空襲体験記を収集し，1,117 名の体験談の中から空襲の逆境から立ち直ることができた理由を抽出した．その上で，立ち直ることができた理由を大別したところ，レジリエンスの個人的要因は「目的意識」「共感」「意志継承」「幸福感・安心感」「自己効力感」の 5 つに分類され，以下の知見が得られた．

- 「目的意識」に関しては，「自分のために」ではなく，「他者(例えば，子ども)のために」がほとんどを占めていた．
- 「共感」に関しては，「自分だけが逆境に置かれているわけではない」と考える者と，「自分より過酷な逆境に置かれている人がいる」と考える者の 2 種類が見られた．
- 「意志継承」に関しては，親族以外の人命を喪失した者に多く見られた．
- 「幸福感・安心感」に関しては，人命を喪失した者には見られず，身体・家屋の喪失(空襲による火傷・自宅の焼失)を体験した者だけに見られた．

以上の結果を踏まえると，今後，将来発生が懸念される大規模自然災害に備えるためには，国民(児童・生徒を含む)一人ひとりに対する防災教育を通じて，防災に関する知識・技術の向上を図るだけでなく，本研究で明らかとなったレジリエンス要因である「目的意識」「共感」「意志継承」「幸福感・安心感」「自己効力感」を育んでいくことも必要と考える．なお，これらのレジリエンス要因を育んでおくことは，自然災害によって万が一過酷な逆境に直面したときに立ち直るために有効なだけでなく，日常生活でのネガティブライフイベントからの立ち直りにも有効であると考える．

参考文献

1) 齊藤和貴･岡安孝弘：最近のレジリエンス研究の動向と課題，明治大学心理社会学研究，No.4，pp. 72-84，2009.
2) 木村玲欧・田村圭子・井ノ口宗成・林 春男・立木茂雄：10 年を超える生活再建過程における被災者の現状と課題―阪神・淡路大震災から 16 年間を振り返る復興調査結果―，地域安全学会論文集，No.27，pp.35-45，2015.
3) 立木茂雄：災害と復興の社会学，萌書房，p.183，2016
4) デーヴ・グロスマン：戦争における「人殺し」の心理学，筑摩書房，p.192，2004.
5) 藤本一雄：戦災体験談から見た逆境から立ち直る力に関する基礎的分析，地域安全学会梗概集，No.37，pp.13-16，2015.
6) NHK スペシャル取材班：ドキュメント 東京大空襲―発掘された 583 枚の未公開写真を追う―，新潮社，pp.220-221，2012.
7) 平塚柾緒：日本空襲の全貌，洋泉社，2015.
8) 千葉市空襲を記録する会編：千葉市空襲の記録，600p.，1980.
9) 宇都宮空襲・戦災誌編集部：宇都宮空襲・戦災誌，宇都宮市戦災を調査する会，568p.，1975.
10) 前橋空襲を記録する会：街角の証言－市民が語る前橋空襲，108p.，1988.
11) 前橋空襲を記録する会：街角の証言－市民が語る前橋空襲(第 2 集)，145p.，1994.
12) 日立市の戦災と生活を記録する市民の会：戦災と生活　日立市民の記録，日立市役所，601p.，1979.
13) 日立市郷土博物館：日立の空襲―語りつぐ戦災体験―，99p.，2003.
14) 水戸空襲戦災記録の会：水戸空襲戦災誌，水戸市，617p.，1981.
15) 八王子市郷土資料館編：八王子の空襲と戦災の記録　市民の記録編，八王子市教育委員会，401p.，1985.
16) 銚子市役所企画調整部市史編さん室編：市民の記録 銚子空襲，銚子市役所，678p.，1974.
17) 熊谷市文化連合：市民のつづる熊谷戦災の記録，487p.，1975.
18) 平塚の空襲と戦災を記録する会：市民が探る平塚空襲 証言編，平塚市博物館，318p.，1998.
19) 佐藤翔輔・杉浦元亮・野内 類・邑本俊亮・阿部恒之・本多明生・岩崎雅宏・今村文彦：災害時の「生きる力」に関する探索的研究―東日本大震災の被災経験者の証言から―，地域安全学会論文集，No.23，pp.1-9，2014.
20) レベッカ・ソルニット：災害ユートピア，亜紀書房，pp.141-160，2010.
21) 山内光哉・春木 豊：グラフィック学習心理学，サイエンス社，2001.